



N これは殺人を犯した少年が、自分の家に女の子を連れてくる場面です。僕は、手前に人がいて、ちょっと引っかけた奥が写っているのが好きなんです。立体的に奥行きがあるよりは、これは自分で、こういう事ができるかなとちょっとやってみて、それで二宮にやらしてもらったのですが、実はこの手です。原作では、この後二人は寝るんですが、寝る代わりに水槽越しに手と手を合わせるといのがミソです。アイドルをバカにしてはいけないですよ、この二人はうまいですよ。「男の子にとって世界一優しい顔で見つめる」と松浦に言うと、ああいう顔をするわけですね。「二宮泣けっ!」(笑い)  
(映写終了)

### 梓組みの中で 自由にやらしてもらうこともある

N 僕はいつもうるさいことを言っているから、逆に俳優に自由にやらしてもらう楽しさがあります。才能がある人でないとだめですけどね。振り付けでは、「このシーンは自由に踊っていいよ!」というようなことはあるのですか?

K もちろんありますよ。ただ即興というのは実は僕はあまり好きではないんです。何故かというと、体にダンスの言葉があるとしたら、それをいっぱい持っている人はいいけど、僕も含めてそんなに多くはないじゃないですか。特にコンドルズのメンバーなどは、みんな僕の振りしか出来ないから、自由に踊らせすぎてもそんなに良くないです。僕は決めごとをどんどん出すので、そこからどうい

うふうに変えてくれるかに魅力を感じますね。

N それは基本的に僕も同じかもしれません。あまり即興的な演技は好きじゃないんです。梓組みがあり、きちっと決めてあるのですが、天才的な人たちには、「自由にやってください」と言います。そういう人はいいですけど、そうでない。

K 見ていてくたびれちゃいますよね。

N 舞台に出ていって止めたくなくなったりします。この頃は、出ていっちゃってるんですよ。この4月にもやる「タイタス・アンドロニカス」という芝居では、切られて手が無い主人公なんですが、吉田鋼太郎という俳優が途中で手を出しちゃったんです。手を使っているんです。

舞台の一番後ろで見ていたら、前のお客さんが「あれ、手があるわ」と、それで僕は「これはダメだ」と思って客席に上がり、そばにいて「おいっ、手が出ているぞ!」と言ったんですが、本人は全然わからないわけです。そんなことがありました。

「天保十二年のシェイクスピア」でも、篠原涼子のカツラが飛んで客席に落ちてしまって、早変わりできなくなっちゃったんです。僕が拾って舞台上に上がりましたが、お客さんは喜んでいました。「天保十二年のシェイクスピア」だったからよかったです。

### そんなことを恥じていたら、 外国で仕事など出来ない

N ところで、アメリカ公演は評判が良かったんですね。

K そうですね。最初は向こうの人も日本舞踊の流れとか、舞踏の流れとかを想像していたのかもしれないけれど、僕たちは全く違っていたので、そのギャップを褒め讃えてくれたという気がします。

N 全く舞踏的要素はないですね。外国では舞踏は人気がありますよね。ロンドンなど歩いていると、山海塾あまがつの天児さんにばったり出会ったりします。舞踏の人は、世界中を飛び回っていますね。それとは違う文脈で評価されるっていうのは大変なことですよ。

K それは僕もびっくりしました。

N 僕はヨーロッパ的な文脈の芝居をすると大体たたかれていますね。

K それはヨーロッパの自負があるから、絶対に褒めないのではないですか。

N 「何だと思っているんだ。東アジアをバカにしているのか」と時には言いたくなるんですが、それは半分しょうがないかなと思うたりするわけです。そういう中でコンドルズのようなやり方は結構大変だろうかと、僕は思うわけです。

K ここまでやったら内心「やるぜ!」と思っています。変な話、ちょっとインチキっぽい感じですよ。それをある部分でちょっと評価してくれると、こんなインチキな方法が許されるんだ、それだったら堂々とインチキをやり通そうという気持ちになります。

N と、おっしゃいますが、あるシーンはやっぱりテクニックがきちっ

と揃って、それは並のものではないですね。僕はその清潔感が好きなんですけれど、「やるときはやるぜ!」というのを隠してインチキというレッテルを自分で貼りながらやる仕事の痛快さがありますよね。

K なんか見抜かれているようで、やりづらいですね。

N フランスでやった時に「FIGARO」という雑誌が僕のことを「Kitsch」と書いたんですね。「まがいものか。いいよわかったよ。どうぞ「Kitsch」だよ」と思いました。そんなことを恥じていたら、外国で仕事など出来ないと思います。ぜひ「Kitsch」の仮面を被って暴れまくってくれるといいなあと思います。



### 稽古場という町工場

N このごろ演劇をしているのは労働をしているんだという気がします。普通の人々が生活しているのと似て、稽古場という町工場に行くと毎日ちゃんと夕方まで目に見えない労働をして帰って来るとい。芸能というのは今まではうんと外れていていいんだと思っていたし、もちろん、そうすることによって見えることもあるけれど、一方でいえば、外れながらも日々いろんな仕事を続ける。それが日常になるような事が僕たちの仕事だなあと思うんです。

K 僕も労働だと思っています。二十歳の頃とまったく同じ事をやっているにもかかわらず、今はちょっとお金になる。「ああ、これは労働になったんだ」と最近思うようになりました。

N 近藤さんのドキュメンタリーを見ていたら、「じゃ、行ってくるよ。」と家族と別れて家を出ていくのが、町工場に行くお父さんという感じがしました。僕は埼玉の川口市の出身でキューポラの町で育ったので、ビデオを拝見したら、お父さんがお弁当を持ってちょっと工場に行くという感じで、すごく良いなあと思いました。

K どういう時に演出のアイデアとか盛り上がっちゃいます?

N 車に乗ったりとか、一人でいる時ですかね。人と喋っていても時々、話を聞いてないとよく言われます。(笑い)

K 僕は電車が苦手なんです。色々な人がいて、観察するのが好

### 舞台は一回で 終わってしまうのが魅力



きで見ちゃうんです。いろんな仕草や感じがあって、面白すぎて逃れられなくなります。一通り全員観察して、次の駅まで行ってしまおう…。仕事に行く前にどっと疲れちゃうんです。(笑い)

N 振り付けを見ていたら「そのアイデアではイヤだ!」と言ったりする人がいておかしかったんですけど?

K よくあります。たぶん同じ方向を向いているんですけど、きっと僕の調子が悪い時なんだろうね。「ああ、そうかそうか、ここをやめよう」と変えちゃうことはあります。

N 僕はもうちょっと頑固かも知れない。でも最近人間ができてきたから、人の意見も聞くようになったと思います。(笑い)

N では最後に、近藤さんに質問したい方は手を挙げて下さい。客A モノを創る過程で何を一番大事にしますか?

K 舞台は火花みたいで、一回で終わってしまうのが魅力です。だから、結構いちがばちかで出し切ろうとします。それが一番大事な気がします。

N では、もうおひとり。これが最後です。

客B 作品の中のパフォーマンスをつなげる上で、気遣っている点は何がありますか?

K 僕は脚本というのが一切なくて、断片的にいっぱい書く。ストーリーじゃないんです。でも結果的には、メッセージをその度に残したいと思っています。作品はどのような形でもいいのですが、流れは最終的にはとても大事にします。断片の時にはどう考えてもつながらないうもの、後からつなげる作業はすごくおもしろいです。激しい動きからいきなり、ちまちました動きに転換して綺麗に踊るといのは、体力的にもかなり無理がある大変なことなのですが、その「流れ」と「無理」の両方に気を遣います。

N お二人のご質問で観客の皆さんの関心の強さがわかりました。私もコンドルズの5月の公演「勝利への脱出」を楽しみにしております。本日はありがとうございました。